
緋弾のARIA 転校生は謎の武偵

キッド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緋弾のARIA 転校生は謎の武偵

【Nコード】

N8115X

【作者名】

キッド

【あらすじ】

戦乙女によって緋弾のARIAに転生させられた主人公
そこでARIA達と原作をぶち壊す

転生とゆづなのプロローグ（前書き）

昔JOKERの名前で書いていました
再び書くつもりだと思いましたが

転生とゆうなのプロローグ

此処は・・・どこだ

『やあやあ』

誰だ？この女

『私は神様だあゝ』

精神科、精神科、合った番号は

-

っと

『頭がおかしい訳じゃない！』

嘘だつつつ！！

『古いぞ』

ひぐらしをバカにするな！

それより此処はどこだ？

『いい加減喋りなよ

此処はあの世』

「ふざけるとシバくよ（怒）」

『ごめんなさいごめんなさいでも本当なんですうゝ』

ちっ

「なんで此処にいるんだ？」

『私の事故であなたを殺しちゃったから』

「目を瞑って歯を食いしばれ」

『だから転生させてあげるの』

「だから此処にいんのか

転生？」

『うん、この中から選んで』

緋弾のエリア

ガンダムSEED

ファイナルファンタジー

「死亡フラグ立ちまくりじゃん!!」

「しょうがないじゃん私戦乙女なんだから」

「俺を殺す気か!!」

「緋弾のアリアに決定」

「勝手に決めんな!俺その小説一巻までしか持ってねーよ」

「他のは今取られたよ」

リアルタイム!?

「さあ願いをいえ」

狙撃科Sランク

全ての銃を使いこなせる
アリア達と常に行動する
身体能力を高くする

「わかったってこーい」

第壱話 出会い（前書き）

今回主人公の名前がわかります

次回のキャラ設定で読み方がわかります

第巻話 出会い

よし状況を整理しよう

此処は武偵校の男子寮のようだ

俺が部屋を見渡すと壁に制服が引つ掛けてあった

「お、ご丁寧に武器があるな・・・・・・・・この武器・・・
・・・どつかでみたような」

「クソ神聞こえるか？」

俺は神を呼ぶ

「呼んだ？」

「この武器はなんだ？」

「私の好きな武器」

ハア

「お前は魔銃ラグナロクとGX 5

死ヲ刻ム影が好きなのか？

てかGX 5と死ヲ刻ム影はG・Uの武器だろ・・・・・・・・」

「正解

ちなみにGX 5は粒子ブレードも使えるから

じゃよろしくね

ふぁーいと」

ちっ

「あのダメ神何考えてんだよ！」

「（とりあえず学校に行くか）」ドゴーン

俺が武偵高に向かう途中爆発音が聞こえた

「（タイミングからしてアリアとキンジだろ

原作よりセグウェイの数多くね？）」

「危ない！！」「アリアが撃たれるよりはいいさ」

アリアとキンジの声がよく響く

「（まあいいか）」

助太刀しようか？」

俺が出てきた時、15台あったセグウェイの内8台がこっちを向いて撃ってきた

「魔銃ラグナロクよ、我求弾丸を装填せよ、
レールガン超電磁砲発射」

ラグナロク凄い威力だな

えっ、装填の台詞？ノリで言っただけ、本当はいらない

向こうも終わったのかこっちにくる

「はじめまして・・・かな？」

ヒステリアの力を持つ少年遠山キンジ
そしてH家の娘神崎・H・アリア」

キンジside

「助太刀しようか？」

1人の男子が茂みからだと8台のセグウェイがそっちをむく
レールガン「超電磁砲発射」

たった一発で全てを粉碎した

俺も倒し終わると男子の方に向かった

「はじめまして・・・かな？」

ヒステリアの力を持つ少年遠山キンジ
そしてH家の娘神崎・H・アリア」

何故その事を知っている！？

主人公side

「お前らの名前知っていて、俺の名前を知らないじゃアンフェアだな

俺の名前は煌 ヒロキだ」

これが神に転生させられた煌 ヒロキとアリア達との出会いだった

第弐話 吉が凶かと聞かれたら凶（前書き）

サブタイトルが思いつかない汗

第式話 吉が凶かと聞かれたら凶

アリアとキンジにあつていざ教室へ！

『もし、神、聞こえるか？』

『聞こえるよ』

『俺って転校生？』

『前からいることになってるよ、クラスは2 - Aね』

2 - Aか、あいつ等と一緒にか

『ちなみにオーラ使えるから

あと、陸奥圓明流も使えるようにいじったから』

いつの間に！

あ、途切れた

2 - A

ここか

とりあえず席につく

「先生、私あいつの隣がいい」

「ぶーっ」

「どうした！？」

「なんでもない、気にするな」

きつたねえな

「先生俺転校生と席変わります」

お、右にアリア、左に理子

これは

からかいチャンス

「良かったな遠山キンジ、両手に花じゃないか」

「な、うるせえ」

「はい、あんたのベルト」

「わかった、これフラグバッキバキにたってるよ」

まあな

バーン

チッ

「恋愛なんてくだらない、そんな事言ってる奴には風穴開けるわよ」

「オイ」

バババツ

全員がこつちをみた

「いてえな弾かすったなあ」

頬からは血が流れていた

ペロツ

「お前二風穴アケてやるう力？」

「ヒロキ落ち着け！！」

ちっ、武藤に救われたな

「威嚇発砲するときは人の位置を確認してからやれ」

昼休み

俺は理解棟の屋上にいる

昼飯はウィーダーinゼリー

「そつえば朝ねアリアがキンジの事探ってたよ」

「あたしにはヒロキについて聞かれたよ」

俺もかよ、キンジだけで十分だろ

「てきとーにキンジのは『昔は強襲科で凄かったんだけどねー』っ

て答えて

ヒロキのは『レキみたいにロボットだよ』って答えた」

俺ロボットかよ！

頭痛くなってきた、帰る

放課後

「ん？何だこれ？

デザートイーグルにドラグノフ狙撃銃？」

手紙だなになに

『チャオつす「いきなり他の漫画のネタ使うなあー！」いきなり怒鳴らないでよね「怒鳴らせてんのは誰だよ」それより、その二つはプレゼント、あと空き部屋にメンテナンス道具あるから、出来るだけ、D G Xと死ヲ刻ム影、ラグナロクは使わないでね、非常時以外は』

きわめて了解

ピンポーン。

チャイムか、このタイミングでこの押し方はアリアか、隣はキンジの部屋か

ピンポンピンポーン

ピポピポピポピポピポピポピン！ピポピポピンポーン！

確かにこれはウザい

そろそろ出るし、アリアの奴隷になれ宣言聞けるかな？

ベランダに侵入すれば大丈夫だな

「そうと決まれば侵入開始」

思いのほか楽だった

「キンジ。あんた、あたしの奴隷になりなさい！」

キター（ ）

アリアの生奴隷宣言

「あ！お前！」

やべー！見つかった

「三十八計逃げるにしかず」

多分こっちに来んな

とりあえずコンビニまでダッシュ

そろそろ、キタキタ

「遠山夫妻仲良く買い物かな?」

「夫妻じゃねえ!

お前は用が済んだのか?」

「晩飯とかだ」

中身、ウィーダーinゼリーグレープ味x8

「大丈夫なのか、それで」

「現に生きている」

「あんた、女子の言ったとおりロボットみたいね、時々人間らしくなるけど」

「関係ない

俺は帰る。そうだ、遠山キンジ、神崎・H・アリアと組め、そうすれば、お前の欲した^{ほっ}真実がわかる。」

「待て!」

「まだ何か?」

「お前は何者だ!?」

「選択肢をやるう」

「選択肢?」

「1・神崎かなえをスケープゴートにしたイ・ウーのメンバー」
「なっ!!」

「2・ただの狙撃科のSランク武偵」

「え、Sランク!?」

「3・死を知ったもの、言い換えれば死を体感した者」

「あんたどれが本当?」

「それを言っでは意味がない

もし1だと言ったら?」

「あんたを逮捕して、ママの無罪を証明させてやる!!」

「そんで、懲役864年から懲役742年に減らすか?」

「あんたどこまで」

バラすか

「バラしてやるよ、1はハズレだ、良かったな、オルメス」

「本当に何者!!」

「答えは、消去法で行けば3、だな？」

「遠山キンジ君正解

俺は死を体感した者。少しなら未来も分かる

だが、教えたりしない

最後に1つ、そこにはお前らの家族がいるかもな
話は終わりだ、じゃあな」

部屋

言い過ぎたかな？

少しメンテして寝よ

「神が原因だなやり方が分かる」

「いくら狙撃科だから壁に寄りかかって寝るとかむ」

寝れたわwww

第参話 強襲科へアサルト（前書き）

サブタイトルが浮かばない
ある意味スランプ

第参話 強襲科へアサルト

さて、確か今日はキンジとアリアが猫探しをするんだっとな
お前は行かないのかって？

ふっ、理由は簡単・・・それは俺が猫アレルギー DAKARAだ！
にしても、隣 キンジ達が五月蠅い

「この・・・疫病神・・・め！」

「熱いね、遠山夫妻、夜道に気をつけな」

放課後、狙撃科棟から見ていた。神曰く俺の視力は両方とも7・0
だそうだ。

レキより見える

どうりで見えすぎる筈だ

まあ俺がウィーダー飲んでる（食ってる？）隣でレキがカロリーメ
イトを食ってた

「レキ、それがお前の主食か？」

「はい

ウィーダーだけのアナタと似てます」

知られてた！？

「食うか？」

俺はカバンからもう一つ出してレキに渡した

「ありがとうございます。どうぞ」

レキはカロリーメイトをくれた

お互い貰ったもの食いながら

「レキ、別に敬語じゃなくて良いぞ」

「？」

わかってないって顔だな

ナデナデ

「何ですか？」

「ワリワリつい、お前が可愛くてそれに、何？で良いんだよ」

「わかった／＼」

顔が少し赤い。風邪か？

「カロリーメイトうまいな。今度買お」

「私も買ってみる」

その後てきとーに解散になった。

レキと帰ったけど

だいぶ親しくなった

「（原作より口数増えたな）」

【お前が原因だ】

変な電波キャッチした

翌日

今日は強襲科に行く日だな

俺も行こ

「ん、遠山キンジか」

「お、ヒロキか」

「どうした？」

まるで 峰理子に神崎・H・アリアの情報を頼んでその後台場で買った1980円で買った腕時計を壊されて、壊れたお前の腕時計を胸にしまわれてすっかり峰理子の金色のブラがみえてしまった

みたいな顔だぞ」

「どっかで見えてたろ！！」

ヤバい楽しい

にしてもよく覚えてるよな原作、一巻以外のことも曖昧だがわかるし

「じゃあな

嫁によろしく」

「おまえなあー！」

来たぜ強襲科！
アサルト

「キンジは・・・いたいた」

「あ！おまえは！強襲科Aランクのヒロキ！転科してくれんのか！？」

いきなり三上に話かけられた

『おい神よ』

『なに？』

『何故強襲科Aランクなんだ？』

『それはお詫び。』

狙撃科以外はAランクだよ』

マジかよ

「あんた、Aランクってどうゆうこと。」

「知らん」

「私は認めない。

勝負よ！！」

「拒否権は？」

「無いわよ！」

やっぱり？

「どこでやんだ？」

「あそこよ」

アリアが指差したのは、小さくもなくデカくもない透明な箱

「ルールはお前が戦闘不能になったら俺の勝ち。

俺を一回でも地面に倒したらお前の勝ち」

「面白いこと言っなあじゃあ始め！」

強襲科担任蘭豹の合図で始める

ズバババン

ガバメントを乱射してくる

「あたらねえよ」

パン

DEを発射する

「きゃっ」命中

だが決定打にはならない

陸奥圓明流を見せてやる

「銃をしまつてどうゆうつもり!？」

「しっかり見てろよ

陸奥圓明流・・・無空波」

「なんのつもり!？」

その程度じゃ倒せないわよ!」

「フィニッシュを入れないだけありがたく思えよ。

もつて3秒

2・・・・・・・・・・・・・・・・1・・・・・・・・・・・・・・・・0」

ボタン

「あれ?身体が動かない」

「そりゃ無空波喰らったからね

力はセーブしたから2、3分で起きれるだろ。

俺の勝ちな」

「本当に何者!？」

「武偵なら自分で調べな」

「わかった。調べてやろうじゃない」

「じゃ、さて、ゲーセンでもよるか」

ゲーセン

さて、そろそろ帰るか

「・・・・・・・・・・」

はあ

なんであいつ等に会わなきゃなんねえんだよ
そう頼んだの俺だけどさ

「白雪に報告しとくか」

「それは止める！」

同感

あんなバーサーカーに会いたくないし

さて、明日はバスジャックの日だどうすつか

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8115x/>

緋弾のアリア 転校生は謎の武偵

2011年12月27日19時47分発行